



米仏のライティング教育文化を読み解く : アカデミックとパーソナルという視点

森本, 和寿
田川, 千尋
渡邊, 雅子
川地, 亜弥子

(Citation)

米仏のライティング教育文化を読み解く : アカデミックとパーソナルという視点

(Issue Date)

2025-04-14

(Resource Type)

report

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495523>



2024 年度学術 Weeks シンポジウム報告書

米仏のライティング教育文化を読み解く

—アカデミックとパーソナルという視点—

2025 年 4 月

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科
人間発達専攻 教育方法学研究室



はじめに

本報告書は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2024 年度学術 Weeks シンポジウム「米仏のライティング教育文化を読み解く—アカデミックとパーソナルという視点—」（2025 年 3 月 15 日）の話題提供と、指定討論のスライドをまとめたものである。

話題提供者に森本和寿氏（大阪教育大学総合教育系特任講師）、田川千尋氏（滋賀大学教育学部特任准教授）をお迎えし、指定討論は渡邊雅子氏（名古屋大学教育発達科学研究科教授）をお願いした。司会は石田智敬（神戸大学大学院人間発達環境学研究科・特命助教、日本学術振興会特別研究員 PD）、川地亜弥子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）が担当した。企画・運営は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間発達専攻教育方法学研究室の友永達也（博士課程前期課程・神戸大学附属小学校教諭）、植田涼香（同前期課程）、賀内望（同前期課程）、石田、川地で行った（所属はいずれも開催当時）。大学関係者だけでなく、小学校、中学校、高等学校関係者や書くことや表現に関わる仕事に携わる方たちにもご参加いただき、総勢 61 名で深めることができた。

アメリカとフランスという、アカデミック・ライティングのスタイルが大きく異なる 2 国の、特に高等教育におけるライティングを中心に話題提供があった。どのようなライティング作品が高く評価されるのかとライティング指導の関係（評価と指導）、アカデミック・ライティングとパーソナルな人生の振り返りやそのライティング作品の関係（アカデミックとパーソナル）、個人の話すことや集団で語り合うことと書くこととの関係（話すことと書くこと）など、ライティング教育の理論と実践における重要な論点が表示された。高等教育を中心としながら、初等・中等教育におけるライティング教育についても示唆深い内容となった。指定討論では、両国ともにパーソナル・ライティングが重要となっているという共通点が表示されると同時に、学術研究（特に人文社会系）におけるポストモダンが浸透する中で、アカデミック・ライティングの教育はいかに研究・実践されていくべきかについて議論が行われた。詳細は、ぜひ本記録をご覧ください。

本シンポジウムは、学術 Weeks によるライティングシンポジリーズ第 5 弾にあたる。第 1 弾（2022 年度）「ライティング（書くことの）評価はどうあるべきか—『ループリック評価』の批判的検討—」、第 2 弾（2023 年度）「ライティング指導の挑戦—アカデミック・ライティングを超えて—」、第 3 弾（2023 年度）「教師教育における書くことの展開と可能性—書くことを教える、教えることを書く—」、第 4 弾（2024 年度）「教師教育とライフ・ライティング—スペイン第二共和制下におけるリエイダ地方の事例をもとに—」と同様に、活発な議論が行われた。なお、この 5 回のライティングシンポジリーズの成果を含みこみ、下記書籍が刊行された。こちらをあわせてお読み頂ければ幸いである。

松下佳代・川地亜弥子・森本和寿・石田智敬編著（2025）

『ライティング教育の可能性—アカデミックとパーソナルを架橋する—』勁草書房。

年度末の多忙な時期にも関わらず、登壇いただいた皆様、ご参加いただいた皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

2025 年 4 月

企画者を代表して 川地 亜弥子

目次

はじめに

川地亜弥子

1 作文による米国近代化の夢—民主的文体の創造—

森本 和寿 1

2 フランスの学校におけるライティング—市民性教育としての機能に注目して—

田川 千尋 10

3 米仏のライティング教育文化を読み解く 指定討論

渡邊 雅子 20

ポスター

〈神戸大学 学術Weeks 2024〉
米仏ライティング教育文化を読み解く
——アカデミックとパーソナルという視点——

作文による米国近代化の夢 ——民主的文体の創造——

The Dream of American Modernization through Composition:
Creating a Democratic Style of Writing

大阪教育大学 森本和寿
2025/03/15 (Zoom)

目次

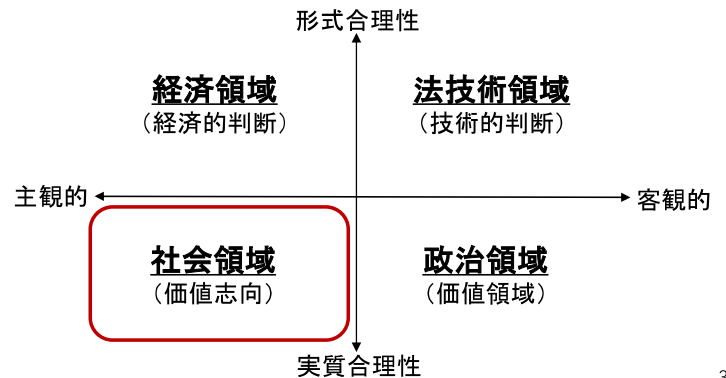
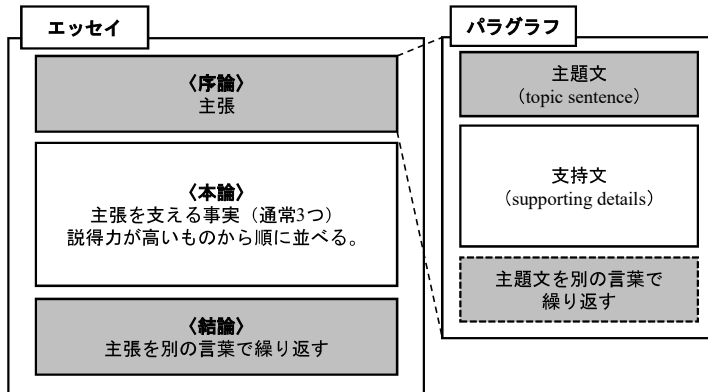
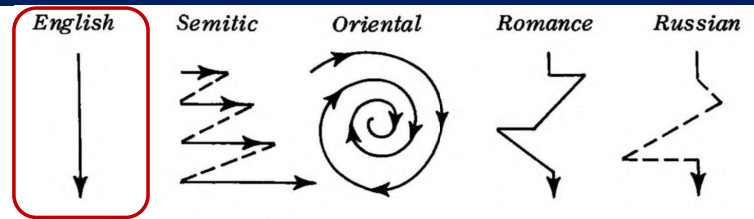
- はじめに
- 米国のAW：現代伝統修辞学
- 米国のPW：表現主義
- おわりに：二つの民主的文体

はじめに

——米国式の文章構造に関する先行研究

・米国式の文章構造

- ・直線的、結論先取りの逆向き構造
- ・経済原理に基づく文章産出



Kaplan, R. B. (1966). Cultural Thought Patterns in Intercultural Education. *Language Learning*, 16, 1-20.
渡邊雅子 (2023) 『「論理的思考」の文化的基盤：4つの思考表現スタイル』 岩波書店。

3

はじめに

——米国式の文章構造の一例

定期的な運動の利点

[1] 近年、多くの人々がフィットネスの必要性を認識するようになった。新聞売り場、テレビ、看板など、ほとんどどこを向いても健康維持・増進のためのアドバイスが溢れている。このようなアドバイスの多くは、ビタミン剤や自然食品を売り込み、健康増進の仕掛けを減らそうと躍起になっている人たちによる商業的な動機によるものだが、中には、特に定期的な運動プログラムを提唱しているものなど、真摯な注目に値するものもある。このようなプログラムは、週に3回、少なくとも30分以上であり、医師が承認している場合、多くの利点をもたらす。定期的な運動は緊張をほぐし、見た目を良くし、スタミナをつける。

[2] 第一の利点である緊張の解放は、即効性がある。[中略]

[3] 外見の改善は、定期的な運動の2つ目の利点である。[中略]

[4] 外見の改善によって生まれる自信に加え、体力の向上はスタミナを生み出す。[中略]

[5] 体重を減らし、魅力的でエネルギッシュな体を手に入れるという目標に対する安易な解決策はメディアを賑わすが、実際にこれらのメリットを手に入れるのは容易ではない。しかし、確立されたエクササイズ・プログラムを実践することで、リラックスした気分になり、健康的に見え、日常的な活動だけでなく激しい運動にも耐えられる十分な体力を手に入れることができるのである。

Latta, B. (2020). A Sample Five-Paragraph Essay, Touro University. <https://www.touro.edu/departments/writing-center/tutorials/a-sample-five-paragraph-essay/> [2024/10/31確認] を筆者訳出

4

米国AWの伝統 ——現代伝統修辞学

・現代伝統修辞学（current-traditional rhetoric: CTR）

- 現代伝統修辞学は、古代ギリシア、ローマに淵源をもつ伝統的な修辞学（古典修辞学）が、近代以降の米国において流通、通俗化したもの。このような流通、通俗化は、教育の大衆化を通してもたらされた。
 - 1959年にダニエル・フォガティ（Daniel Fogarty）によって作られた造語で、20世紀の大半の間、アメリカの作文指導で一般的に使われていた形式主義的な修辞学を指す。現代伝統修辞学は、作文の完成品の形式的側面を強調することに特徴がある。現代伝統的なエッセイは、一般的なものから具体的なものへの厳格な動きを採用している。一つの命題文（thesis sentence）または一つの段落、3つ以上の段落の裏づけとなる例やデータ、そして序論と結論がそれぞれ1段落ずつ表示される。一般的なものから具体的なものへの動きは、トピック・センテンス（一般化された文）を特徴とする段落の中で繰り返され、そのトピック・センテンスは連続するセンテンスの中で展開または特定される。（Crowley, 2015, p. 156）
 - 現代伝統修辞学の起源：ジョン・ロックの経験論とスコットランド常識学派のリアリズムの影響を受けた英国修辞学の伝統に由来。具体的な始祖となる人物：18世紀の英国修辞学を代表するジョージ・キャンベル（George Campbell）やヒュー・ブレア（Hugh Blair）
- この米国土着の修辞学は、米国アカデミック・ライティングを下支えし、強力に規定してきた。

Crowley, S. (2015). Current-Traditional Rhetoric. *Encyclopedia of Rhetoric and Composition: Communication from Ancient Times to the Information Age* (T. Enos (Ed.)), Routledge, 156-157 (first published in 1996).

5

米国修辞学の形成・発展 ——伝統性と現代性の相克

・米国流の修辞学への時代的要請

- 1730年代～独立革命（1775年～1783年）
 - 英国の大学に比肩する高等教育を確立することが志向されたという時代状況。
 - スコットランド出身の修辞学者であるケイムズ、キャンベル、ブレアらを積極的に受容。
- 南北戦争（1861年～1865年）から世紀転換期
 - 米国カレッジにおける聖職者支配からの脱却。新しい知的権威と、それを表現する手段の必要性。

・伝統性と現代性の相克の中に生まれた米国修辞学

- ハーバード大学 修辞学・弁論術ボイルストン教授職
- 伝統性：欧州の知的権威に比肩するための古典修辞学の徹底
- 現代性：欧州とは異なる知的権威による民主的国家建設の志向
 - 南北戦争後、米国のカレッジは変貌を遂げ、貴族的なエリートだけでなく、社会の全市民に奉仕することを約束し、学問と自由な探究を奨励する方向へと向かった。〔中略〕ハーバード大学は、チャールズ・エリオットの指揮のもと、大胆な科目選択制を導入し、1894年には初年次学生の必修科目を減らされ、1897年には初年次学生の必修科目は、一つの科目を除いてすべて廃止され、学生は自分の希望する科目を自由に選べるようになった。唯一、すべての学生に対して必修とされたのが、修辞学である。修辞学は、初年次において1年間の履修が義務づけられ、大学生の文章指導としての役割を担った。（森本, 2025）

森本和寿（2025）「現代伝統修辞学というパラダイム：米国における作文論理の形成とその問題」
日本教育方法学会『教育方法学研究』50巻、（印刷中）

6

現代伝統パラダイム

・科学的修辞学：人文学から科学へ

- ・ 米国では、古代世界における人文知としての「教養」に対抗する新しい知的権威として「科学」を据えることが試みられた。新しいカレッジは中流階級にサービスを提供し、社会的流動性を高める役割を果たす必要がある。
- ・ 「科学」の論理に基づくライティング：人文学から科学への転換の正当性を表現するレトリック

トボスの教養

・教育修辞学としての暗黙知的性格

- ・ 「現代伝統修辞学は、何よりもまず**教育修辞学 (teaching rhetoric)**であり、教育が意味する情性と実験との闘いのすべてを伴うものである」 (Connors, 1981, p. 208)
- ・ このパラダイム「現代伝統パラダイム：引用者註」の明白な特徴は、3世代にわたって何百ものアンソロジーや作文テキストの内容と構成原理を提供してきた。思うに、よく耳にする「作文テキストは似たり寄ったりだ」という不満は根拠のないものである。驚くほど似ているのは、想像力の欠如というよりも、広く共有されたパラダイムの症状なのだ。作文テキストは、概念的な独創性よりも、わかりやすさや教育的な工夫の有無で判断されるのが適切である。**教科書は確立されたパラダイムを精緻化し、永続させる**ものであり、安定した状態で学問を行うための主要な手段 (principal vehicles) の一つである。そのため、教科書は特にパラダイムに関する貴重な情報源である。 (Young, 1978, p. 31)

・現代伝統パラダイムの支配性

- ・ 現代伝統修辞学に則らなければ、アカデミックな文章とは認められない。

Connors, R. J. (1981). Current-traditional Rhetoric: Thirty Years of Writing with a Purpose. *Rhetoric Society Quarterly*, 11(4), pp. 208-221. 7
Young, R. (1978). Paradigms and problems. *Research on Composition: Points of Departure* (C. Cooper & L. Odell (Eds.)), National Council of Teachers of English, 29-47.

現代伝統修辞学への批判 ——5段落作文という型の絶対化

5段落テーマ作文に関するテーマ作文

昔から、大学の先生の中には5段落テーマ作文を馬鹿にする人がいた。しかし、私は彼らが間違っていることを示すつもりである。私がいつも5段落テーマ作文を書く理由は3つある。[中略]

私がいつも5段落テーマ作文を書く第一の理由は、文章構成のスキームを与えてくれるからである。[中略] 考えすぎずに済むし、特にエッセイのテストでは、時間の節約になる。

5段落テーマ作文の第二の理由は、1つのトピックに集中させることである。[中略] このように、5段落テーマ作文で書くことで、考えすぎないようにすることができるのである。

この方法で書く最後の理由は、最も重要なものである。一度書いてしまえば、ほとんど何にでも使える。**神は存在するか。なるほど、イエスと答えて3つの理由を挙げることもできるし、ノーと答えて3つの異なる理由を挙げることもできる。そんなことはどうでもいいのだ。その定式に放り込んでおけば、何を書いても、良い成績が得られること間違いなしである。そして、それこそが教育の真の目的である。つまり、あまり深く考えず、時間をかけずに良い成績を取るのだ。**

というわけで、私がいつも5段落テーマ作文を書く理由、そして大学でもそうし続ける理由を3つ挙げてみた。[後略]

現代伝統修辞学への批判 ——形式的完成への執着

• 形式の物神化

- 「5のルール (Rule of Five)」 (Labaree, 2023)
 - 大学初年次教育までに書かされた5段落エッセイは、学部では5節立てのリサーチペーパー、大学院では5章立ての博士論文。
 - 5段落、5節、5章という形式が、アカデミック・ライティングにおける一つの指標として、あるいは一つの型として共有されている。
- 「5段落フェチ (five-paragraph fetish)」 (Labaree, 2023)
 - 形式の物神化は、文章に書かれる内容への無関心や意味の剥落を招く。
 - 「数字に支配された教育 (Teaching by Numbers)」 (Taubman, 2009)

• 形式と形式主義

- 形式主義 (formalism) : 形式 (form) の目的化
 - 「型破り」と「型なし」が異なるように、私たちが思考したり執筆したりするうえで形式は必要かつ有用である。この点を認めたうえで、ラバリーは「形式 (form)」と「形式主義 (formalism)」を分けて考える必要性を説く (Labaree, 2023)。形式主義とは、形式の遵守が目的化した状態である。文章執筆において形式は必要であるが、形式主義に陥ると、意味の空洞化を招く。

Labaree, D. (2023). *Being a Scholar: Reflections on Doctoral Study, Scholarly Writing, and Academic Life*. Independently published. 9
Taubman, P. (2009). *Teaching By Numbers*. Routledge.

[小活] 現代伝統修辞学の強みと弱み

• 現代伝統修辞学の強み

- 現代伝統修辞学の要素還元主義的なアプローチは、アカデミック・ライティングにおいて求められる要素を細かく細分化して示してくれるという点に強みをもつ。
- どのような文章が適切なのかを型として明示し、そのような「優れた文章」がもつ特徴を、段落構成、文構成、文法や語彙という要素へとブレイクダウンすることで、教育可能な形へと落とし込む。こうして確立された教育修辞学は、ライティング教科書という文化的容器の中で保存され、文章指導を通して継承・再生産することができる。

• 現代伝統修辞学の弱み

- 1959年に「現代伝統修辞学」という名称で名指されて以降、米国のライティング教育研究の中心的アジェンダは、現代伝統修辞学の超克であった。
 - 現代伝統修辞学が、厳しい批判に晒されながらも、米国アカデミック・ライティングにおいて中心的・支配的な地位を占めてきたのは、この修辞学的立場が米国における「節約」、「効率」の思想を体現したものであったからである。それは教育コストを削減するという意味での効率性に優れた教育修辞学であったことも意味している。
- 文章指導が形式主義化していくと、文章から意味が剥落するという陥穽にはまってしまいう点には留意が必要である。

米国PWの登場と隆盛

——米国表現主義における〈パーソナル〉への注目

・現代伝統修辞学の硬直性の打破

・要素還元主義を超えて

- ・「英語の作文は、大学の科目としてのその歴史の大半を通して、ほとんどの人にとってただ一つのことを意味してきた。すなわち、作文における機械的かつ文法的な正確さをひたすら強制されるということである」（Connors, 1997, p.112）。
- ・「よい文章（美文）の特徴を要素分解し、その要素が表れている文章を書く」という言説・実践の乗り越え。

・米国表現主義の登場と隆盛

- ・ (1) 1920年代：進歩主義の時代
- ・ (2) 1960年代：米国修辞学のルネサンス

・ ※ 「パーソナル・ライティング」という用語規定の難しさ

- ・ 何がパーソナルであるかは何がパーソナルであると認識されるかという社会文化的規範に依存する。
- ・ 「何がパーソナルなものであるかは、現在の学問的規範や西洋文化的規範（その規範が内包しているのと同じくらい何かを排除している規範）によって定義され、制限されている」（Brant et al., 2001, p. 55）
- ・ 日誌、日記、回想録、自伝、随想、手紙etc

Brandt, D., Cushman, E., Gere, A., Herrington, A., Miller, R., Villanueva, V., Lu, M., and Kirsch, G. (2001). The Politics of the Personal: Storying Our Lives against the Grain. Symposium Collective. *College English*, 64(1), 41-62.
Connors, R. (1997). *Composition-Rhetoric: Backgrounds, Theory, and Pedagogy*. University of Pittsburgh Press.

11

米国PW隆盛の背景

——光を放つ個人と書かれない光

・鏡とランプ

- ・個人の内面に知的源泉、表出・表現すべき源泉を見出す。
 - ・人間は外界の自然を反射するだけの「鏡」ではなく、内面世界から光を放つ「ランプ」と認識されるようになった。人間の内面の深い部分を理解するという近代的試みは、「個人」への注目を促し、個人の内面世界に何かしらの価値あるものを見出そうとする（Abrams, 1971）。
- ・生徒・学生が自由に「ありのまま」を書けば、それ自体に創造性が宿るという文章観、文章指導観を後押しした。

・教育の大衆化

- ・従来の教授法ではライティング教育が立ち行かなくなったという教育現実。
- ・ 「書けない生徒・学生」問題
 - ・教育の大衆化によって「書けない生徒・学生」の数が増え始めると、このような生徒・学生をいかに教育するかということが喫緊の課題となった。
- ・光を放つはずであるとみなされた個人がその光を放てない（書けない）とき、問題は個人の資質にではなく、教授法、教育方法にあると考えられた。

Abrams, M. H. (1971). *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*, Oxford University Press.
（水之江有一訳（1976）『鏡とランプ：ロマン主義理論と批評の伝統』研究社）

12

表現主義の鍵概念

・ライティング・プロセスの再帰性・複線性

- ・伝統的なライティング教育：直線的・単線的な執筆過程を基本としていた
- ・「プロセスは直線的ではなく再帰的である」こと、また、プロセスは単線ではなく複線であるため、「書き手のパーソナリティや認知スタイル、書き手の経験、書く課題の性質によって異なる」ことを強調（Murray, 2004, p. 4）

・フリーライティング

- ・日常に取材したことを自由に書く「フリーライティング」という手法によって、文章執筆に対する学生の意識を変える（イングフィッシュ（English）への対抗）。
 - ・「家に帰って、思いついたことを何でも書きなさい。10分で、1ページが埋まるまで書きなさい」（Macrorie, 1970, p. 20）
 - ・クラスやワークショップにおいて「私たちの共通点は何か」というテーマが出される場合もある（Elbow, 1989）

カウンターカルチャー的
（バーシング『禅とオートバイ修理技術』）

・教師のいないライティング（writing without teachers）

- ・評価者である教師に向けて文章を書くことで生徒や学生が萎縮して文章を書かなければならない状況を問題視し、少なくとも初学者にとってこの問題は致命的である。
 - ・「教師がいない」というやや挑発的な語の意味するところは、無教師の推奨や教職の否定ではなく、教師が絶対的・優越的評価者としてではなく、教師が一人の読者としてレスポンスやフィードバックをする教室文化を形成する必要性を説いたものである。教師にはそのような場をつくるファシリテーターとしての役割が期待された。

Elbow, P. (1989). Toward a Phenomenology of Freewriting. *Journal of Basic Writing*, 8(2), 42-71. 13

Macrorie, K. (1970). *Uptought*. Hayden Book Company.
Murray, D. M. (2004). *A Writer Teaches Writing* (revised 2nd edition), Thomson/Heinle (first published in 1968).

フリーライティングの一例

赤いボールを買った。

セラピー。でも効果はない。足の毛はまだ伸び続けている。官能的な丸い雲、直立不動で整列し、点検を待っている。幸せで軽やか、若々しい気分にくれる。自然がそうしてくれる。新鮮で生き生きとした気分にくれる。森や湖にいるときは決してタバコを吸わない。美しさを損なうから。お金が欲しい。お金持ちになった気分を味わって、無とはどんなものかを知りたい。ギブランを思い出す。彼は、悲しみと喜びは相対的なものだという。喜びを知るためには悲しみを理解しなければならない。私は彼を信じている。かつては多くのことを信じていた。

私は、愛について人々に助言しようと決めた。キスをして世界は目を閉じない。誰かが私の声を聞いてくれることを願っている。腐って捨てられてしまったものをあまりにも多く見てきた。自分の考え通りに動けたらいいのに。頭ではわかっているのに、体がついていかない。そうなのか。デトロイトの少女たちが路地で他の少女を襲い、安全ピンで頬と足を刺した。なぜか大笑いしてしまった。息が臭い。きっとミルクのせいだ。みんなミルクは体にいいと思っている。でも、ミルクは肌を荒れさせ、太りやすく、動脈硬化の原因になる。動脈が硬くなったら、もうダメだ。（Macrorie, 1970, p. 20）

Macrorie, K. (1970). *Uptought*. Hayden Book Company. 14

フリーライティングの意義

——「自己表現」という厄介者と付き合う

・自己にとっての意味の剥落、レリバンスの欠如を超えて

- ・直線的、定型的な文章訓練を通して「書ける」ようになったとされる学生が、しかし「自分には何も言うことがない」という心境に立たされてしまう。フリーライティングは、このような「書けてしまう」問題、切実性はないが期待されたプロダクトは生成できてしまう問題に対する一種の学びほぐし (unlearn)としての役割を有している。
- ・私の「中略」仕事は、学生たちに書くべきことがあると説得することだった。6年生以上のライティングを学ぶ生徒の多くがそうであるように、この学生たちも「自分には何も言うことがない」と信じていた、正確に言えば、そう思い込んでいたのである。「南北戦争の主な原因を分析しなさい」という課題が与えられれば、教科書的な知識に基づいてなんとかやり遂げることができるが、「あなたにとって重要なことを書きなさい」と言われても、自分には無理だと感じていたのである。(Judy, 1980, p. 43)

・ケアや癒しとしてのライティング

- ・初学者がライティングにおいてつまづくのは、何も書き方を知らないからだけではない。書くという行為に対する自己効力感の欠如もまた、ライティングを停滞させる。

・オーサーシップとオーナーシップ：自己開示の決定権

- ・フリーライティングとして書いたものを他者に公開するかどうかは、書いた本人に選ぶ権利がある。
- ・フリーライティングは自己のための文章という側面が強いため、場合によっては他者に公開するのに適さないプライベートな内容が含まれる。フリーライティングが自己開示の強要にならないように、開示の決定権が個人にあるという点は、フリーライティングを用いる指導において極めて重要な点である。

Judy, S. (1980). The Experiential Approach: Inner Worlds to Outer Worlds. In T. Donovan, and B. McClelland (Eds.), *Eight Approaches to Teaching Composition*. National Council of Teachers of English, 37-51. 15

AW – PWの相互作用

——初年次科目における実践例

・初年次科目「哲学入門」における実践

- ・(1) 自分の意見を述べるために信頼できる環境が必要である場合
- ・(2) 自分の意見に疑問を抱くために信頼できる環境が必要である場合
 - ・ノースカロライナ州出身の26歳の美術専攻3年生ローリー・ウィルソン (Laurie Wilson) のケース
 - ・フィッシュマンの授業においてウィルソンが探究心を発揮したパーソナルな問題関心は、「犯罪者が矯正施設でどのように扱われているか」であった。
- ・ウィルソンは、当初、最高警備の刑務所で看守をしていた父親から得た見解に基づいて、犯罪者にはあまりにも多くの贅沢と権利がありすぎると考えていたが、学期を通したPW、議論、AWを通して、学期末に部分的に意見を修正した。
 - ・「最初のPW」外には、カミソリの刃を砕いたワイヤーでできた二重フェンスで囲まれた広大なエリアがあった。私はとても怖気づいた。しかし、中に入ってみた。フェンスの内側にある刑務所は、まるでホリデー・インのようだった。設備の整ったジム、図書館、病院、キッチン、学校等、さまざまな施設があった。独房棟には、私がこれまでに見た中で最も大きなテレビが備え付けられていた。兄は、自分が大人になったら、あそこで暮らすのも悪くないとさえ言っていた。母はショックを受けた。母は息子に対して、刑務所ではいつ何を食べるか、いつ寝るか、いつ運動するか誰かに指示されるのだから、刑務所には行きたくないだろうと言った。すると息子は、家でも母が同じことを言っているに答えた (p. 656)。
 - ・「最後のPW」たぶん、犯罪と動機、そして囚人が助けを求めているかどうかによると思う。囚人の主な特徴として悪が浮かび上がってくる場合、つまり残虐な罪を犯し、誰の助けも望んでいない場合、そのような囚人は贅沢も許されない終身刑に処すべきだ。助けてくれる人を助ける思いやりと、それ以外の人を厳しく罰する気概が必要なのだろう。
- ・日常において「学んだ言説を哲学的に探究することで、彼女は言説との関係の中で自分自身を再配置するようになった」 (Fishman & McCarthy, 1992, p. 659)

Fishman, S., and McCarthy, L. (1992). Is Expressivism Dead? Reconsidering Its Romantic Roots and Its Relation to Social Constructionism. *College English*, 54(6), 647-661. 16

[小活] 表現主義の強みと弱み

・表現主義の強み

- ・「**個人的な言語と学術的な言語の相互作用を促進する**ような方法」は、「学術的言説の学習を妨げるのではなく、**その両方の発達を促す**」(Fishman & McCarthy, 1992, p. 659)
- ・誰もが発揮できる個性を——それが社会的に有用であるかにかかわらず——もっている
と前提し、ライティング教育は、それを表現することを全面的に、あるいは部分的に手
助けするものであると考える。
 - ・ただし、自己表現そのものを目的化するか、あるいは手段として活用するか、その判断は、表現主義者の間でもグラデー
ションがある。

・表現主義の弱み

- ・表現主義者は、そのラディカルさが魅力であると同時に、そこに実践上の留意点や、場
合によっては限界性がある (McCarthy, 1994)。
- ・(1) 自分自身の経験について書くことは、本質的に良いことだと思い込んでいる。
- ・(2) 生徒・学生のPWを高く評価しすぎると、**強制や文化的対立が生じる可能性に敏感に
なる**必要がある。
- ・(3) 特定の種類の文章を重視することを提唱する文献やアプローチに対して、より懐疑的
になる必要がある。

「感想文」や“PW”という語の射程の精緻化
⇒【日本の文脈に引き付けると】日記か、振り返りか

McCarthy, S. (1994). Opportunities and Risks of Writing from Personal Experience. *Language Arts*, 71(3), pp. 182-191.

17

おわりに ——二つの民主的文体

現代伝統修辞学	表現主義修辞学
卓越性・発達重視の修辞学	生命性・生成重視の修辞学
能力主義（メリトクラティック）な性格	生命主義的な性格
文体における「民主的」性格とは、（才能と） 努力に基づく習得可能性に開かれていること。	文体における「民主的」性格とは、個々人が もつ個性の表現の促進に開かれていること。

- ・アカデミック・ライティングとパーソナル・ライティングを、
排他的な関係でとらえず、両者を往還的・架橋可能なものとし
て考えることが、特に教育という文脈においては重要である。

18

フランスの学校におけるライティング 市民性教育としての機能に注目して

2025年3月15日 (zoom)

田川千尋 (滋賀大学)

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

1

本日の発表の構成

1. 自己紹介
2. フランスの学校教育におけるライティングの概要
3. ディセルタションまでの道のりー中学校のライティング指導
4. 書くことで格差を乗り越えるー日誌を用いた初年次教育の事例紹介
5. まとめ

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

2

1. 自己紹介

ー本日のテーマの研究背景ー

- 専門は教育社会学、特にフランスの学生の社会学（Sociologie d'étudiant）
- 高大の移行、特に大学における初年次を中心とした中退・留年問題を研究
 - ・フランスは「高等教育は国の使命」 大学は高等教育機関の中でも唯一開放的なアクセス、中等教育修了資格（バカロレア）を取得していれば登録が（ほぼ）可能
 - ・「開かれた高等教育」という理念を実現している大学と、そのようなシステムにおいては不可避である中退・留年問題
- 中退者・学業困難者向けの支援の実践
 - ：大学の正課・正課外の連携、地域連携など
- 誰にでも開かれた民主的な高等教育のあり方について考えている

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

3

2. フランスの学校教育におけるライティングの概要

アカデミックライティング：ディセルタシオン

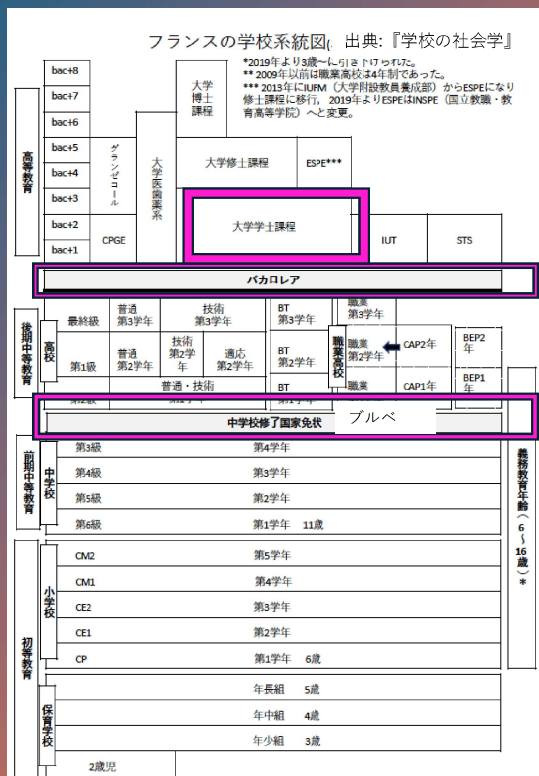
- ・「正・反・合」
- ・型の習得：導入（イントロダクション）、展開（テーズ、アンチテーズ）、結論（サンテーズ）
- ・すべての教科（特に国語・哲学以外では地理・歴史）での書くときの型
- ・型を学ぶことが思考を規定していく→市民として共通の「論理の型」を学ぶこと＝市民性教育

中等教育課程における二つの国家資格

- ・高校修了時（バカロレア）：ディセルタシオンの型の習得
- ・中学校修了時（ブルベ）：国語試験におけるライティング大問2つ

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

4



←★書くことを使った初年次教育の事例

←ディセルタシオン（フランスのアカデミックライティング）

バカロレア・哲学試験研究
（坂本 2022ほか）

論理構造と社会・文化
（渡邊 2021ほか）

←★中学校段階（ブルベ）における国語教育

3.ディセルタシオンまでの道のり—中学校のライティング指導

教育目標 民主主義を生かす

(2024改定学習指導要領)

期待と目標

- 第4学習期の最終学年である第3学年では、民主主義生活の概要を説明し、共和国の制度が、その制度が可能にし、その枠組みを提供する討論によっていかに活気づけられるかを示す。
- また、民主主義的な生活は、本質的に経済的、社会的、政治的な生活への市民の効果的な参加に基づいているという事実を強調する。こうして民主主義は、固定された不変の現実としてではなく、達成されるべき理想とみなされる。その結果、すべての市民が民主主義の生活に行動し、参加することができるのである。

→このための共通基礎 (Socle Commun)

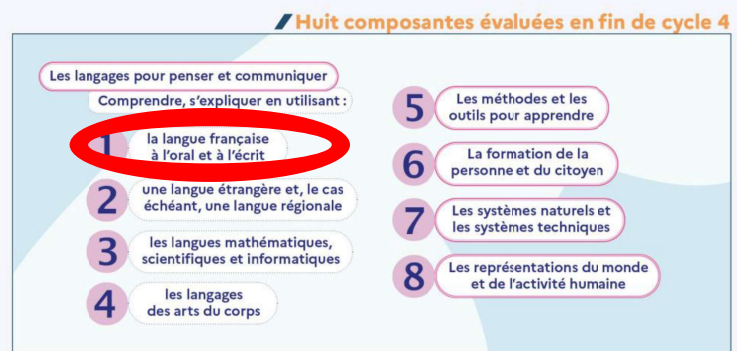
- 第4学習期の特徴
- 各分野の授業が共通基礎に対してすること
- 3. 個人と市民の養成**
(後略)

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

7

思考し、伝達するための言語 以下「を理解し、使用できる」

1. 口頭と筆記でフランス語
2. 外国語あるいは地域語
3. 数学・科学・情報言語
4. 身体芸術言語
5. 学習のための方法とツール
6. 個人と市民の養成
7. 自然と技術のシステム
8. 世界と人間の活動の表現



国語筆記 (3 時間, 100点/400点の全科目合計)

文学的な文章と、これに関連する画像からなるフランス語の作品群に基づいて行われる。

- 文学的文章・場合によっては画像からの読解課題 (50点-1時間10分)
- ディクテーション (10 点 - 20 分)
 - 普通課程受験者は約600字
- 小論文(40 点-1 時間30 分)
- 2科目から選択

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

8

筆記では二つの大問がある

■ 文学的文章・場合によっては画像からの読解課題（50点-1時間10分）

「理解と解釈、文法と言語コンピテンシー」

テキスト読解（古典）と関連する画像（現代）からの問い、文法

■ 小論文(40点-1時間30分)

■ 2科目から選択：省察課題（sujet de réflexion）と想像課題（sujet d'imagination）

● 省察課題：

例（2023）「少年少女が主人公の作品を読んだり見たりするのが好きですか？それはなぜですか？」

論理を組み立てる（argumentation）練習

複数の論拠（arguments）が示せること→自分の意見以外にも耳を傾け想像すること

💡 必ずしもそれらは（その後のディセルタシオンでのように）正と反でなくとも良い

賛成と反対で書きなさいという指導も見受けられる

引用の精緻さのレベル：何の本で誰が言っていたか程度には言えること

→ディセルタシオンの段階的な教育

● 想像課題：文体の模倣、文化習得（「空想日誌」教育実践の事例も）

ディセルタシオンとの関係、書くことと話すこととの関係 （2020年学習指導要領・国語から抜粋）

- （…）[注：前の学習期において]生徒たちは文学的文章を含むさまざまな種類の文書を読み、理解し、解釈する能力を身につけた。また、複雑化する状況において、筆記と口頭の両方でコミュニケーション能力と表現力を高め、知識を構造化し、自分の考えを発展させる。第4学習期のフランス語教育は、**フランス語の正しく正確な使用、批判的思考の発達、中学校で必要とされる判断力の資質に基づいて、自立した思考を構築するための重要な段階である。**（…）
- 授業は主に3つの分野に分けられる技能と知識を中心に構成されている： - 文法、綴り、語彙、言語の歴史（古代語、現代の外国語、地域語と連携）を学ぶことにより、言語システムの総合的な理解を可能にする言語能力を深める； - **共通の文学的・芸術的文化を発展させることで、国家遺産の文学作品、現代作品、フランス語の文学作品、古代言語や外国語・地方語の文学作品、その他の芸術作品、特に静止画や動画との対話を図る。**
- 第4学習期の口頭言語の授業では、**口頭言語の体系化されたジャンルを練習し、その特徴を確認することで、生徒がそれに慣れるように指導する。リーディングやライティングの活動と連動して、特別な時間が割かれる。明確なアプローチの一環として、生徒たちは、よく練り準備された（élaborés）口頭による談話（discours）を聞き役立てることを学び、それを自ら発展させ、効果的な準備に依り、表現をコントロールし、よく練られ構造化された討論（discussions）を可能にする議論（débats）へそれを役立てることを学ぶ。**

Cycle4（中学）国語で訓練するコンピテンシー	共通基礎の分野
口頭で理解し、表現する - 複雑な口頭でのメッセージやスピーチを理解し、解釈する - 聴衆に向かって話すとき、習熟した方法で表現する - 口頭での意見交換に建設的に参加する - 話し言葉の表現力と創造力を活用する	1,2,3
読解 - 理解度を管理し、自立した読者になる - 文章以外のテキスト、画像、複合文書（デジタルも含む）を読む - 文学作品を読み、芸術作品に触れる - 文学作品の解釈を深める。	1,5
ライティング - 書かれた言葉の主な機能を活用する - 効果的なライティングの戦略と手順を採用する - 文章を豊かにするために読書を活用する - 議論の直感的な使用から、より制御された使用へと移行する。	1
言語の仕組みを理解する - 口語と文語の違いを理解する - 簡単な文と複雑な文の仕組みを分析する - 語彙と文法のスベルを固める - 語彙を充実させ、構造化する - テキストや談話を分析し、発展させるために必要な概念を構築する。	1,2
文学・芸術文化の要素を身につける - 文章や芸術・文学作品を解釈し、個人的な表現を豊かにするために、文化的な参考文献を活用する - 異なる文化や時代の文学・芸術作品の関連性を確立する。	1,5

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解く—アカデミックとパーソナルという視点—

11

教育における書くことと話すことの繋がり

- 19世紀よりすでに近代的教育制度の中で意識された「ライティングの構成準備としての口頭表現」という目的（カレ国民教育大臣, 1887）（Lahire, 2000）

→「書くための話すこと」

- 重要なのは自分がなぜそう考えるのか（筆記・口頭両方で）他人に論理的に伝えられること
「口頭と筆記において、仏語を用いて理解・表現すること」

« Comprendre, s'exprimer en utilisant la langue française à l'oral et à l'écrit »（共通基礎, 第4学習期）

→現代における「書くこと」と「話すこと」の一致の理由

- 口頭の「伝え方」にも書く時の型が強く要求される

→「話すための書く型」

- **国民の共通の対話の型**が教育を通して作られている／伝えられていると言える（渡邊の一連の研究）

- **多民族国家におけるフランス的「統合」概念**（フランスの理念のもとに市民となる）

書くことと話すことの繋がりが生む格差への批判

- 一方でこれが教育選抜における強力な再生産機能を果たしていることへの批判
- 例えば**哲学のディセルタション**においてとりわけ教授意図の生徒による理解の大きな差からくる学習格差の問題（Bautier et Rayrou, 2009）
- グランゼコール準備級から上級公務員試験まで、**エリート選抜における口頭試問の重要性**
- ディクテーション・口伝文化と科目とジェンダー差（数学の事例, モスコニ, 2022）

4. 書くことで格差を乗り越える 一日誌を用いた初年次教育の事例紹介ー

- フランスの学校教育の場におけるライティングを代表するものではない
- どのような教育の場での実践なのか：パリ第8大学とは
 - '68を象徴する実験的大学としてヴァンセンヌに誕生、後にサン＝ドニに移転
 - パリ郊外 サン＝ドニ（93県）
 - 1970年代以降に移民労働者が集住したフランス国内でもっとも貧困層が多く社会的課題を抱えた地域
 - 庶民階層出身学生の割合が多い
 - 普通バカロレア以外のバカロレアを持つ学生が多い（取得バカロレア種類の階層間格差）
 - 当初よりバカロレアを持たない社会人の受け入れ（VAE）や滞在許可証を持たない非正規滞在の外国籍学生などの受け入れにも積極的な反体制的な大学
 - 社会・文化的に大学文化・大学での学業に遠い学生たちの抱える学業困難の比率の多さ

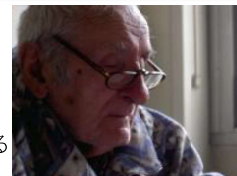


実践の歴史・背景 パリ第8大学教育学部

■1970年代～ジョルジュ・ラパサード（精神分析, 民俗学）

- ：反体制的・学生側に立つ教育文化を作る
- エスノメソドロギー*における「記録」の文化

*社会を事実（les faits）として捉えるのではなく人々により今まさに作られている可変的なものとして捉える
＝実践の記録が重要



■1990年代～A.クーロンによる日誌を用いた初年次教育実践と研究

- ：学生に日誌を書かせ, 分析／観察記録により学生に「なる」までを描く

『Le métier d'étudiant（学生のメチエ）』（1997）



■2010年代～S. カクポ, C.ルメットルによる実践

- ：必修授業「教育社会学」内での初年次教育としての「自己社会分析」
- 自己を社会的に分析・認識することでスティグマを取り除き,
- 大学という世界での文化習得を学生がよりよくできるしようとする取り組み



神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

15

実践の目的と特徴

■クーロンとカクポ&ルメットル二つの実践

＝大学における学生の「社会化」の自己記録

■ブルデューの「自己」について取り組む可能性への挑戦

学生は社会的決定論を理解することで, 合理的な意思と努力によって自分の気質を「鎮圧」しようとする
ことから可能な「自己への働きかけ」への道を開く（Kakpo et Lemêtre, 2019）

- ・「生まれながらにして学生になるわけではない」
- ・学生に「なる」のである
- ・大学への期待や必要性は社会的に位置付けられたものだ気づくこと

例：「私は読書が好きではない」から「私は読書を楽しむことができるようなある種の読書能力をこれまで身につけてこなかった」という捉え方の変換

→（のちに「自律した」市民となるための）「自律した」学生像があるべき姿として置かれた学生支援

→パリ第8大学のみならず, フランスにおける初年次教育全般で共有された視点

神戸大学 学術Weeks 2024 ライティング・シンポジウムⅤ
米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

16

フランスにおける高大接続・ 初年次支援の特徴

- 社会・文化的格差が意識した初年次教育（学生の社会学による中退・留年者の特徴把握）
- 大きく分けて二つのタイプがある
- ◆進路変更支援
 - 進路を自らを見つけるための各種インターンシップやサービス・ラーニングが用いられること（数日間の観察的なものから、数年のmission locale, service civique）
 - これらが個人指導・面談だけではなく主として集団的に行われること
- ◆汎用的能力涵養（soft skillsとの英語名が普及）あるいは「教養」の補完
 - 近年展開されている初年次支援：「初年次を2年で」：専門分野の教養（家族にその分野の基本的知識・文化がない学生を想定）
 - 国語授業の例（語彙を増やす, 文化を知る）
 - 学習方略授業
- 支援に見られる「**自律した学生像**」
自律性に焦点を当てた学習方略講座や
進路変更の強力な支援（自分に合った進路であればモチベーションが高まるというロジック）
※ただし、より直接的な学習支援も学部内でチューター制度・少人数ゼミ（TD）により並行実施

5. まとめ

- 書く・話す両方で議論の共通の型を持つこと
- 書くことと話すことの繋がり
→ **自律した市民**として,ものごとを理解し（口語で・筆記で）意見を述べるため
- **フランスにおける統合**の理念との関係「共和国のもとに」
→ **市民性教育**の理念が, 書くこと, 話すこと
の教育にも現れている
- 教育の中に見られる重要な理念「**自律**」
→ さまざまなリソースを使いこなし自らの中で
さまざまな視点から議論できる自立・自律した
市民へ

参考文献

- 坂本尚志 (2022) 『バカロレアの哲学「思考の型」で自ら考え、書く』日本実業出版社.
- 田川千尋 (2018) 「進路形成における自立的生徒・学生像：ナント大学区を事例に」 園山大祐編『フランスの社会階層と進路選択』勁草書房、13-23頁.
- 田川千尋 (2020) 「大衆化した高等教育における学生受け入れの問題と改善に向けた取り組み」 細尾萌子・夏目達也・大場淳編『論述型大学入試に向けて思考力・表現力をどう育むか—バカロレアの国フランスからのヒント』ミネルヴァ書房、195-210頁.
- 田川千尋 (2021) 「高校から高等教育への進路選択システム—高大の接続支援と公平性に関する考察—」 園山大祐編『フランスの高等教育改革と進路選択：学歴社会の「勝敗」はどのように生まれるか』明石書店、105-122頁.
- 田川千尋 (2022) 「フランスの大学入試 バカロレア試験と高等教育登録システム」『未来志向の大学入試デザイン論』大阪大学出版、93-103頁.
- ブランシャール, M., カリエット=ランプリエール, J., 田川千尋訳『学校の社会学』明石書店.
- ブルデュー, P. (1999, 2018) 『教師と学生のコミュニケーション』藤原書店.
- ブルデュー, P. (2012) 『国家貴族I・II』藤原書店.
- モスコニ, N. (2022) 「教師の実践はどのようにして性別間不平等を作り出すか？」 園山大祐編『教師の社会学 フランスにみる教職の現在とジェンダー』勁草書房.
- 渡邊雅子 (2023) 『「論理的思考」の文化的基盤』岩波書店.
- 渡邊雅子 (2021) 『「論理的思考」の社会的構築 フランスの思考表現スタイルと言葉の教育』岩波書店.
- Kakpo S. et Lemêtre C. (2019) « L'auto-socioanalyse : un outil au service de la démocratisation universitaire ? », *Socio-logos* [Online], 14.
- Bautier E. et Rayrou P. (2009) « Les inégalités d'apprentissage », PUF.
- Chervel A. (1984) « L'école peut-elle enseigner la langue maternelle? », *Histoire de l'éducation*, n° 22, pp.85-92.
- Lahire B. (1993) *Culture écrite et inégalité scolaire*.
- Lahire B. (2000) *Culture écrite et inégalité scolaire*, Presse Universitaire de Lyon.
- Terrail J.-P. (2009) *De l'Oralité*, La Dispute.
- Terrail J.-P. (2016) *Pour une école de l'exigence intellectuelle*, La Dispute.

神戸大学 学術Weeks 2024
ライティング・シンポジウム V (2025/03/15)

米仏のライティング教育文化を 読み解く 指定討論

名古屋大学大学院教育発達科学研究科
渡邊 雅子

なぜライティング教育が重要なのか

「書くこと」は・・・

- 個人の思考力を養う （個人の認知レベル）
= 情報をいかに「編集」して「構成」するか（書く「型」の習得を通して）
ex. 同じ絵を見て説明しても説明の構成や情報の取捨選択が異なる（渡辺2004）
⇒ 世界をどのように（どの角度から）見るのか、
どのような情報が重要なのか（書く「ジャンル」の習得 ex. 論証なのか、説明なのか、説得なのか）
- 社会規範を学ぶこと（ものの考え方・適切な表現）（マクロレベル）
= 目的に応じて書く型にも多様な種類がある
- 社会とのコミュニケーションを取るツールとなる
- 個人の能力評価（テスト、入試、就職のエントリーシート）（メゾレベル）

4 コマ漫画の作文実験

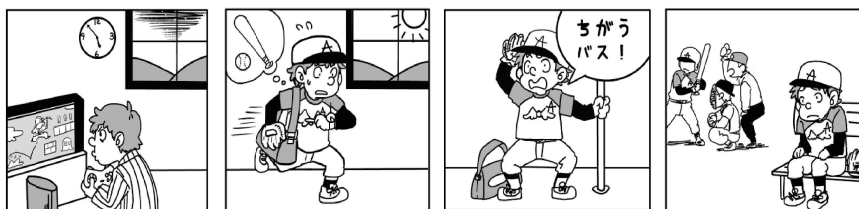
(渡辺,2004)

【自由課題】

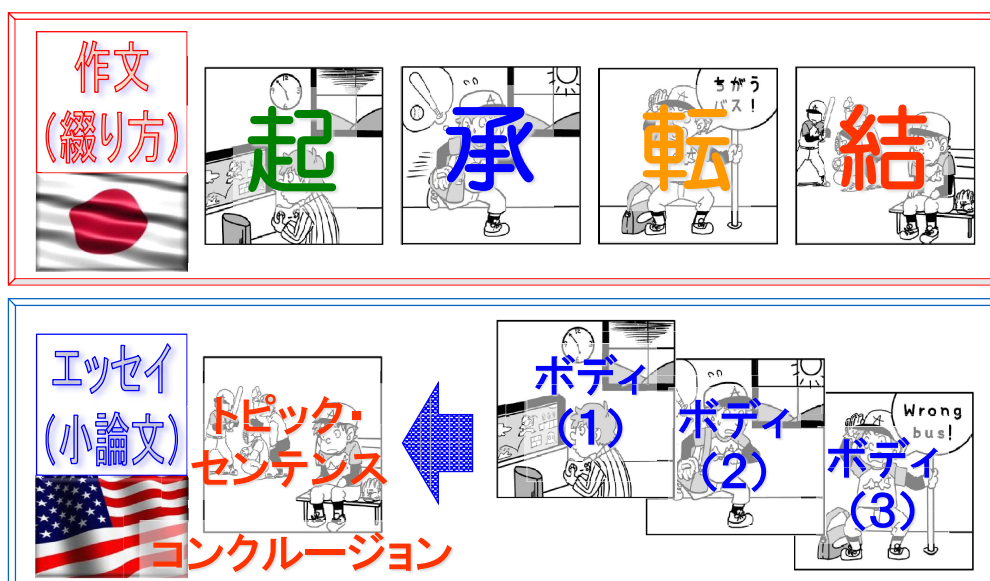
どちらかに○をして下さい。男・女 生まれた年と月：昭和 年 月

絵を見て書く作文

けんた君は小学生です。テレビゲームと野球をするのが大好きです。けんた君は野球チームのエースピッチャーで、毎週土よう日の朝早く野球のしあいをします。下の絵はけんた君の一日のでき事をえがいています。けんた君にとってその日がどんな日だったか、書いて下さい。(書く前にまず四つの絵をすべて見てから書き始めて下さい。)



実験結果とスタイル比較



実験結果とスタイル比較（理由付け）



書くことには二つの側面がある

- **技術的な側面** （アカデミック・ライティング）能力を発揮し競争に勝つ
書く「スキル」（意味が一義的に決まる書き方）
書き方の「作法」＝学問の作法を学ぶ（科学的方法・論証の方法）
大学では「専門分野」の作法を学ぶ
- **価値的な側面** （パーソナル・ライティング）他者、社会、自己との繋がり
人格形成（感想文⇒他者の「気持ち」とのすり合わせ・道徳観の育成）
自己表現（日記・エッセイ/随筆⇒ 個人の内面の表現・自己実現）
二つの側面は、異なる自己実現と社会的自己の形成に寄与する
この両面をカバーする点に『ライティング教育の可能性ーアカデミックとパーソナルを架橋する』（勁草書房4月14日刊行）の大きな意義がある。

米仏を比較する大きな意義

- アメリカの「5パラグラフエッセイ/パラグラフ・ライティング」は、アカデミック・ライティングの基礎になっている＝「世界標準」
* 実際は、書き方を通した「アメリカ社会/文化」（経済効率性と自己主張）の発現
 - フランスの「ディセルタシオン」（仏式小論文）は
フランス社会で生きていくために不可欠なツール。
ディセルタシオンの構成（弁証法の正・反・合）で考え、話し、書けなければ
高校卒業も大学入学も就職もできない。
欧米と一括りにされるが、実はヨーロッパ式思考法の典型・象徴であり、アメリカの文化的カウンタパート
- ⇒本シンポジウムは、両国のアカデミックとパーソナルをまとめて比較・俯瞰できるとても貴重な機会

米仏小論文はどう違うのか：2つの論理

アメリカのエッセイ

- 目的：説得・論証
- 構造：書き手の主張とその根拠のみを述べる（的を射る矢）
- 根拠：科学的なデータ、個人の体験、歴史的な体験
（モデルは科学の仮説検証）
- 結論：問いに直接答える
「Yes/No」いずれかの立場を取る

フランス式小論文

- 目的：視点間の矛盾の解消
- 構造：<反>が<合>を導く
- 根拠：古今の著名な思想や文学のテキストの厳密な引用
- 生徒の個人的な意見や体験は全く意味を持たない
（モデルは哲学の方法）
- 結論：「Yes/No」の**二元論を超えるより積極的かつ広い結論を要求**

書く教育の仏米比較（中等教育まで）

アメリカ

- 日常で頻用される12の作文ジャンルを小学校で習い、書き手の目的に合わせて目的別に書き分けられるように訓練
- 小学校から大学まで学力はエッセイにより測られる
- 個人的な体験を資源にする
- ジャンルの組み合わせで個性発揮。他と差別化して競争に勝つ
- 「真正の自己」の確立＝自分なりの考え、自分の意見の確立

（渡邊 2004）

フランス

- フランス式小論文で書けるようになるために初等から中等教育まで段階的かつ綿密に組まれたカリキュラム。
- 文法（小学校）、論理学（中学校）、修辞学（高校）
- 自由7科の形式主義の継承
- 共通教養を基に厳密に論証
- 「修辞学的な自己」の確立＝自分の意見から距離を取り、他者の意見も全力で論証し、新たな視点を提示

（渡邊2021）

アメリカ：森本論文・発表

- 米国流の書き方がどこからきたのか（ヨーロッパの知からの脱却と自律）
ヨーロッパの人文的教養⇒科学の枠組みを選択（近代の象徴）
新しい中産階級の創出、科学的方法の適用（多様なバックグラウンドの人々に受け容れられやすい）大衆民主主義的な書き方の獲得か？分断？
「教育修辞学としての暗黙知的性格」（森本）（形式の目的化）
このパラダイムとしての役割は、①現在大学で求められている批判的思考と創造性（2つのC）とは、どのようなつながりがあるのか、あるいは乖離しているのか？
②ポスト近代の思考法・分析方法の変化により米国流の書き方は変わるか？
（たとえば科学的方法の変化＝分析的・要素還元主義⇒複雑性理論、システム理論/量子力学、哲学の変化＝現象学へ）
PW：米の哲学的アプローチと日本のアプローチとの根本的な違いは？

フランス：田川論文・発表

- 日記から「認識の変化」を引き出す。社会的に作られた役割の自覚⇒そこに自己を位置づけることにより、社会の中で通用する自己表現のあり方を学ぶ。社会の中の「私」を創り上げる。（田川）
- フランスの場合、それは「自律した市民」になるための「自律した学生」になること。←フランス的！フランスの教育と社会のエッセンスを初年次教育で刷り込む（素晴らしさと困難）。それをPWを通じて**主流文化**を獲得していない「困難な学生」に対して行う意味。

⇒PWを日本の初年次教育で行うとしたら目的は何になるのか。

⇒日本の場合、大学の序列によって「方法」と「目的」も変える必要があるか？

中等教育におけるアカデミック・ライティング⇒緻密かつ段階的、統合的な言語教育が行なわれても困難な学生を作る要因は何か？

中学校の「自立した読者」とは？ 大学になると「自律」になる変化はどのようなものか。

アメリカ、フランスに共通した課題

* パーソナルライティングの可能性 （学業・教育において）

* ローカルな問題として・・・

• 社会統合としての書く教育 vs. 社会的分断を作る書く教育

• 分断は解決不可能か

• アメリカとフランスで異なる解決の方法はあるか

* グローバルな問題として・・・

• グローバルな書き方の浸透による経済第一主義・科学主義の世界的潮流
⇒ これはアメリカ的なのか？フランスの立ち位置は？日本はどのような立ち位置をとるのか。

参考・引用文献

- ◆浅野檣英. 2018. 『論証のレトリックー古代ギリシアの言論の技術』 筑摩書房.
- ◆大堀精一. 2018. 『小論文 書き方と考え方』 講談社.
- ◆Kaplan, Robert, B., 1966, “Cultural Thought Patterns in Intercultural Education.” *Language Learning* 16:1-20, p.14.
- ◆香西秀信. 1998. 『修辞学的思考ー論理でとらえきれぬもの』 明治図書出版.
- ◆沢田允茂. 1976. 『考え方の論理』 講談社学術文庫.
- ◆野矢茂樹. 2006. 『入門！論理学』 中央公論新社.
- ◆米盛裕二. 2007. 『アブダクションー仮説と発見の論理』 勁草書房.
- ◆渡辺雅子, 2004, 『納得の構造ー日米初等教育に見る思考表現のスタイル』 東洋館出版社.
- ◆渡邊雅子, 2021, 『「論理的思考」の社会的構築ーフランスの思考表現スタイルと言葉の教育』 岩波書店.
- ◆渡邊雅子, 2023, 『「論理的思考」の文化的基盤ー四つの思考表現スタイル』 岩波書店.
- ◆渡邊雅子. 2024. 『論理的思考とは何か』 岩波書店.

13

米仏のライティング教育文化を読み解く ——アカデミックとパーソナルという視点——

2025年 3月 15日（土） 10：00 ～ 12：00 頃 @ Zoom オンライン

本シンポジウムでは、「米仏のライティング教育文化を読み解く」と題して、米仏のライティング教育文化を、アカデミック・ライティングとパーソナル・ライティングの両面から読み解き、それらを比較・検討する。近刊『ライティング教育の可能性—アカデミックとパーソナルを架橋する—』（勁草書房）において、米国とフランスのライティング教育文化を分析した森本和寿氏と田川千尋氏の報告に加え、日本・アメリカ・フランス・イランにおける思考表現スタイルの比較を通して、論理的とされるスタイルが文化圏によって異なることを解明した渡邊 雅子氏を指定討論に招き、議論を深めていく。

■ 話題提供

森本 和寿（大阪教育大学）

「作文による米国近代化の夢：民主的文体の創造」

田川 千尋（滋賀大学）

「フランスの学校におけるライティング：市民性教育としての機能に注目して（仮）」

■ 指定討論

渡邊 雅子（名古屋大学）

参加ご希望の方は、下記リンク（または右QRコード）よりお申し込み下さい。
<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf56E2ZyJVO0IW42ey-v5d1gKZndjuHKYPpsP8-EzIz1GAgUw/viewform?usp=header>（締切 2025年3月13日） ※定員90名。定員を超えたら締め切らせて頂きます。※入力頂いた個人情報は本イベントの運営の目的のみに使用いたします。



■ 企画・運営

神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間発達専攻教育方法学研究室

川地亜弥子（教授）・石田智敬（特命助教（学振PD））

友永達也（博士課程前期課程・神戸大学附属小学校教諭）

植田涼香（博士課程前期課程）・賀内望（博士課程前期課程）

問い合わせ先 academic.weeks.kawaji@bear.kobe-u.ac.jp



神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2024 年度学術 Weeks シンポジウム報告書

米仏のライティング教育文化を読み解く
—アカデミックとパーソナルという視点—

著者 森本和寿・田川千尋・渡邊雅子

編者 川地亜弥子

企画 川地亜弥子・石田智敬・友永達也・植田涼香・賀内望

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 教育方法学研究室

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-1-1

発行 2025年4月14日